

## 知って当たり前 介護ガイド帳



上原喜光

作詞家の星野哲郎さん  
(写真)が85歳で逝った。

高等商船学校の学生時代に肺結核にかかり、「これでは戦争に間に合わない」と大泣きしたエピソードがあるそうだ。

なぜこんな話を思い出したかというと、先日、インパール作戦に従軍した人たちの集まりに顔を出していたからだ。一番若い人でも88歳、最年長は93歳である。ほとんどが、少なからず介護を受けていた。彼らにとって、仲間ほど大事なものはないらしい。

「家族に老人ホームに入ればと言われたんだよ」

### 老人ホームが野戦病院送りとダブる

こう切り出した男性は野戦病院送りを思い出してソツとしたという。野戦病院へ送られたが最後。わずかな食事、風呂なし、糞なしの環境でベッドに寝かされ、ほとんどの人が死んでいく。だから多くの負傷兵は野戦病院に行きたがらず、隊に残る道を選んだ。戦線に残れば戦友が助けてくれるからだ。「ただね、家にいれば、家族に迷惑をかける。戦争のとき、仲間に助けてもらったんだし、今度は施設に入ろうかな」「今の老人ホームは食事はあるし、風呂だってある。あの頃の野戦病院とは違うんだよ」

死んだら靖国で会おうと誓った人たちが、「老人ホ

ームで会おう」と冗談を飛ばすのを聞き、何ともむなしい気になった。

ドイツの介護制度も、わが国のように在宅介護を基本に置いている。子が親の面倒を見るのは当然だという考えがあるからだ。ただ、ドイツでは、在宅介護を親族によって受けている高齢者には現金が支給される。在宅介護の大切さ、ひいては家族のあり方を重視しているからだろう。星野さんは、知覧特攻平和会館を訪れた感想をく僕らの命は生かされていますか、日本は大丈夫ですかと語りかけてくる」と書き残している。介護も戦争なのだ。

(全国介護者支援協議会会長)

